

いつも ひなみち 山口理 画 いりえわかめ



ムツとした夏の空気の中に汗が飛ぶ。

「ほれ、パスパス」

「よっしゃ、もらった！」

おれ、田所一平は、友だち五人と、ラグビーごっこをしてる。あくまで、ごっこだ。ボールは丸いサッカーボールだし、公園で遊んでいるから、当然ゴールポストもない。まあ、早い話が、なんちゃってラグビーだ。な。

「うわっ！」

広樹のやつが、いきなりタックルしてきた。

「本気でタックルするなよ。ケガするだろ、このバカー！」

おれは倒されたままの体勢で、広樹をにらみつける。広樹とは幼稚園の頃からの友だちで、現在も同じクラス、五年二組なんだ。これ、腐れ縁ってやつか。

「バカってなんだよ。だいいちこれ、ラグビーだぜ。鬼ごっこやってるんじゃないんだ。タックルぐらいでガタガタ言うな」

「試合じゃないんだから、やり過ぎだろうって言ってるんだよ」

「なんだと、この野郎！」

と、そこに他の三人が割って入る。

「どうしておまえたち、いつもこうなっちゃうんだよ。もつと楽しく遊ぼうよ」

たしかに、いつもこうなっちゃうんだ。だけどおれにも意地がある。

「けっ、おまえなんかともう口きかねえ。おれ、帰る」
そう言い捨てて、おれは自転車にまたがった。ほてった